

# 近代英語期の英訳聖書マタイ伝にみる進行形

田辺 春美

## 1 はじめに

### 1.1 近代英語期の進行形の歴史

「BE動詞＋現在分詞」の形式で表される進行形の用法は後期中英語期から見られるが、初期近代英語期までは頻度、用法ともに十分発達していなかった。17世紀以降徐々に頻度が高くなり、19世紀、20世紀とますます頻度が増加した。最近の研究の一つであるKranich (2010:107) のARCHERにおける頻度調査によると、19世紀から増加し、20世紀前半になると急激に頻度が高くなり、その増加のプロセスはグラフでは典型的なS字を描く。進行形は、形式面でbe being builtのように受動態でも、have been buildingのように完了形とも一緒に用いられるようになり、19世紀はじめの頃までには現代英語と同じ形式・機能を持つようになった。20世紀には主観的な用法も発達する。

進行形が十分に発達するには、使用頻度が高くなることと現代英語と同じ用法で使われるようになることが必要である。進行形の使用頻度の歴史的な変遷に関しては、Dennis (1940) をはじめとし、18世紀から20世紀の散文を扱ったStrang (1982) など数多くの研究が行われてきた。特に史的コーパスの利用が可能になると、調査対象のコーパスも徐々に大規模となった。例えば代表的なものをあげると、Arnaud (1998) は19世紀の書簡、Smitterberg (2005) は19世紀のマルチジャンルのCONCE (the Corpus of Nineteenth-Century English)、Kranich (2010) はARCHER (A Representative Corpus of Historical Register) からデータを取り、広範に近代英語期の進行形を調査したところ、いずれも徐々に頻度が高くなり、特に19世紀、20世紀と現代に近づくにつれ顕著な増加が認められた。

進行形がよく現れるジャンルについても研究が多く行われてきた。Strang (1982) は小説のジャンルで進行形の頻度が高いことを指摘し、19世紀のCONCEを調査したSmitterberg (2005) は、書簡、小説、ドラマのジャンルに

多く見られることを示した。このようなジャンルと対照的に、頻度が低いのは科学やディベートなどのジャンルである。書簡、小説、ドラマのジャンルは、必然的にどれも口語的でインフォーマルな要素を強く持っている。そのようなジャンルに進行形が広く現れることから、進行形は口語的な特徴との結びつきが強いと考えられる。Kranich (2010:101、表5) では、ARCHER-2 に現れる進行形を時代とジャンルごとに表にしているが、ここでも進行形はドラマ、小説、書簡に最も高い頻度で、科学や医学は低い頻度で現れている。例えば科学は小説の約5分の1にしか過ぎないのである。

進行形が好まれるジャンルが口語性の高い分野であることに関連して、言語外の要素についても言及する。1990年代以降歴史的なコーパスを研究に援用できるようになり、書簡における進行形の研究が熱心に行われるようになった。例えば、Arnaud (1998:139-140) によれば、進行形を使うのは男性よりも女性の方が多いことが、また、Nurmi (1996:160-162) によれば、進行形は下層ジェントリー階級の書簡に多く見られることが指摘された。Nurmiらが使ったThe Corpus of Early English Correspondenceには、下層ジェントリー階級よりも下の階層の書簡は入っていないので、下層ジェントリーの書簡で進行形を使っているからと言ってそれがスティグマになるとは言えない。しかし、進行形が好まれるジャンルと社会言語学的な傾向性には強い関係があると考えられる。

## 1.2 言語研究のコーパスとしての近代英語期の英訳聖書

英訳聖書を歴史的な変遷を調査するための資料とする場合、いくつか注意すべきことがある。代表性を持ったコーパスとして編集された大規模コーパスと違ってジャンルが宗教に限られること、あくまで翻訳であるため原典の影響を受けている可能性があること、神の言葉である聖書の英訳には伝統的には格調の高さや威厳が求められること、特に重要な英訳聖書である欽定訳聖書 (King James Bibleともいう) は初版が出版された1611年当時すでに保守的な訳文とされ、その語彙は約1世紀ほど古い時代の英語であったが (船戸1975:47)、欽定訳の本文をなるべく保持しようとしたその後の改訂訳はさらに保守的であることなどである。従って、英訳聖書には書き言葉であっても私的な書簡のように出版された当時の英語がリアルタイムで忠実に反映されているわけではない。しかし、同じ内容をできるだけ正確に原典から翻訳し

つつ、翻訳された時代にふさわしい慣用的な英語も取り入れようとするところで、訳文に変化の生じている語句にはそれぞれの時代で許容される極限の英語が観察できる。この他にも英訳聖書を研究する意義はある。大規模コーパスを時代ごとに区切って比べて経年変化を調査する場合、ある語彙や形式の出現頻度が高くなってきたことが、本当に増加を意味しているのかどうかかわからないことがある。特定の語彙や形式が多く現れるのは、内容や文脈からそのような表現がより多く必要とされたことがコーパスに反映されただけかもしれない (Los 2015:81)。また、頻度が増加したジャンルそのものが口語化 (colloquialization) を起こしているだけかもしれない。その点、英訳聖書の場合、同じジャンルで同じ内容の文が時を経て繰り返し英訳されているので、言語の比較をするのに有利と言える。

16世紀の英訳聖書の各版の訳語を比較する研究は、欽定訳聖書の成り立ちを検討する意図でしばしば行われてきたが、後期近代英語期から現代英語訳についての研究は、多数の版が出版されてきたにも関わらずあまり盛んではなかった。Jespersen (1909-1949:IV, 177) は、MEGで進行形の発達について、欽定訳と「最初の平易な現代語訳の試み」(寺澤・川崎 1993:付録2)であるThe Twentieth Century New Testament (1898-1901)を比較し、欽定訳のマルコ伝では進行形は29例であったのがThe Twentieth Century New Testamentでは106例に増加したことを報告している。また、寺澤盾 (2012:116-117) は、マルコ伝14章18節でNRSV、KJB、Wyclif、古英語のWSG (=West Saxon Gospel)を比較したところ、欽定訳以前の訳では動詞が単純形や分詞になっていることを指摘した。欽定訳と現代英語訳を比較することはあっても、その間に出版された後期近代英語期の英訳聖書はあまり顧みられることがないが、取り上げるそれぞれの英訳聖書の特徴や研究に使う場合の限界を理解した上で、活用できる場所はあるだろう。本研究では、NRSVを軸として欽定訳に遡る形で進行形に訳されている動詞の出現頻度数、進行形が現れる統語的な特徴、機能について調査し、後期近代英語期の進行形の発達状況について考察する。

### 1.3 17世紀以降の英訳聖書の紹介

17世紀から19世紀に至るまで300年の間、欽定訳聖書の影響があまりに強く、改訂版はなかなか出版されなかった。あまりにも人口に膾炙した欽定訳

の語句をみだりに変更することは大いにためられたものと思われる。しかし、近代英語期に新たに翻訳された英訳聖書は数が多く、1611年から1881年まででも60種類以上にも上る（寺澤・川崎 1993）。本研究では、欽定訳聖書の改訂であるRV, RSV, NRSVだけでなく、18、19、20世紀の訳も考慮しつつ、以下の9種類の英訳聖書の訳文を比較する。

The New Revised Standard Version (NRSV) (1989)

The Revised Standard Version (RSV) (新約1946；旧約52)

F. R. Weymouth: The New Testament in Modern Speech (WNT) (1903)

The Revised Version (RV) (新約1881；旧約1885)

L. A. Sawyer: The New Testament Translated from the Original Greek (Sawyer) (1861)

Noah Webster: The Holy Bible (Webster) (1833)

J. Wesley: The New Testament (Wesley) (1755)

D. Mace: The New Testament in Greek and English (Mace) (1729)

King James Bible, the Authorized Version (KJB) (1611)

まず、欽定訳聖書改訂の流れに従ってRV, RSV, NRSVについて説明する。RVは、教派を超えた人選による会議のメンバーが、改訂箇所をなるべく少なくし、欽定訳かそれ以前の古い訳の改訂を一原語一訳語主義の方針に基づき原典に忠実な逐語訳を行った。原典研究の進歩と相まって、正確さはしましたが、欽定訳の美点がすくなからずそこなわれたともいわれる（船戸 1969: 53-56）。これを改訂したRSVは、アメリカで改訂されたAmerican Standard Version (ASV) を底本とし、当時の最新の聖書学の知見を取り入れ、正確な原文解釈を行った。訳文については欽定訳の「簡素で古典的な文体」の伝統はできる限り保存しつつも平易な現代英語を用いた（寺澤・川崎 1993: 付録2）。RVとRSVはかなり欽定訳の影響の強い訳文であるが、これをさらに1989年に改訂したNRSVは訳文に大幅な変更を加えており、長年の伝統であったthou, thee, thy, thineを完全に排除し、性差別表現を回避した点も新しい。

WNTは、神学およびギリシャ語文献学者であったF. R. Weymouthが自ら校訂したギリシア語の本文にもとづいて、語学的に正確でありかつ当時の英語の慣用法にあった訳を試みたものである。副題に 'an idiomatic translation

into everyday English' という句が含まれることからわかるように、わかりやすい英訳を目指した。

L. A. SawyerのThe New Testament Translated from the Original Greek (1861)は、この聖書のPrefaceによると、Teschendorfのギリシア語本文からの正確な翻訳を目指しながら、完全に自由訳をおこなった。

アメリカ英語独自の綴り字や語法を強調した辞書の編集でしられるNoah Websterは、敬虔なキリスト教の信者でもあり、1833年に聖書翻訳も出版している。彼のThe Holy Bibleは、当時の価値観に沿って欽定訳の古語的表現や卑俗な訳語を改めたが、英語の面でも人を先行詞とするwhichをwho,thatにしたり、直接法現在beをareにしたりするなど文法の現代化に貢献した(寺澤・川崎 1993:付録2)。

J. Wesley: The New Testamentは、メソジスト教会を設立したJohn Wesleyが聖書の原典を理解できない人々にも聖書を読むことができるように翻訳した新約聖書である(船戸 1969:51)。ギリシア語原典にあたり、欽定訳の用語を約1万2千カ所改めた。この変更は、のちの欽定訳の改訳に影響をあたえた(寺澤・川崎 1993:付録2；寺澤 2016:86)。

Daniel Maceは、説教を得意とする英国の長老派の牧師であった(Gordon 2004)。The New Testament in Greek and Englishは、ギリシア語本文と英訳の対訳でその英語は当時の口語英語を多少反映している(寺澤・川崎 1993:付録2)。ギリシア語訳については問題もあり、出版当時あまり評価されていなかったが(Marlowe, "Mace's New Testament, 1729")、18世紀前半というきわめて早い段階に口語訳を試みたことは革新的であった。

## 2 各英訳聖書のマタイ伝における進行形の調査

### 2.1 進行形の頻度

この節では、9つの英訳聖書においてマタイ伝において、どのように進行形が使われているのか、進行形に訳されている動詞の出現頻度数、進行形が現れる統語的な特徴、進行形の機能について調査した結果を示す。調査対象の進行形は、「BE動詞+動詞の現在分詞形」の構造とする。「There+BE動詞+名詞句+動詞の現在分詞形」のように、there構文と進行形が組み合わさった構文も2例みられたが(Matt. 16:28 (NRSV, RSV etc.) there are some

standing)、これらは対象から外した。BE動詞が省略されている場合 (Matt. 9:24 (NRSV, RSV) for the girl is not dead but sleeping) は対象に入れた。従来、英訳聖書の英語について論じる場合、どのような語彙を選ぶのかという点に高い関心が寄せられていたが、本論では進行形という文法形式の選択にもっとも大きな比重が置かれているため、必ずしも各聖書における訳語が同じ語彙でなくても、進行形という形式が選ばれていれば同等とみなした。調査の手順としては、各聖書を比較するに際し、NRSVを軸として進行形を採取し、それに対応する他の聖書に生じる形式を調べた。その結果、表1が示すように、マタイ伝には全部で進行形は87例使われており、そのうちそもそも欽定訳聖書でも進行形が使われていたケースが7例あった (パターンA)。また、NRSVのみで進行形が使われており、他の聖書では進行形以外の形式で訳されていたケースは12例であった (パターンB)。これらを除く58例では、NRSVは進行形で1種類以上で進行形の形式をとる (パターンC)。パターンCにおいては、年代ごと、聖書ごとの進行形出現のバリエーションを観察することができた。

表1 NRSVの進行形に対応する各聖書の翻訳パターン別頻度

パターン		件数
A	全ての聖書で進行形	7
B	NRSVのみ進行形	12
C	NRSVは進行形、1種類以上の聖書で進行形	58
合計		87

### 2.1.1 パターンA

旧約聖書の英語とヘブライ語原典との関係を研究した橋本(1996:118-122; 2005:213)は、欽定訳で使われている進行形は、英語の進行形と対応するヘブライ語の動詞形を訳すために使われているため、Tyndale以降の16世紀の英訳聖書の翻訳を引き継いでいると述べている。新約聖書はギリシア語からの翻訳であるが、同様なことが言えるかもしれない。表1のパターンA、すなわちマタイ伝のなかでNRSVの進行形が欽定訳まで遡ることができるケースは7例あった (NRSV 21:23 as he was teaching, 23:13 are going, 24:38 as ... they were eating and drinking, marrying and giving in marriage, 24:41 will

be grinding, 26:26 were eating, 26:46 let us be going, 28:11 while they were going)。それらの進行形について、16世紀の英訳聖書、Tyndale, Coverdale, Bishop's, Genevaで対応箇所を調べて見たところ、3例(21:23, 24:41, 26:46)はTyndale以降全て進行形であったが、2例(23:13, 26:26)はBishop's Bibleですでに進行形が使われたことがわかった。24:38, 28:11の2例で、欽定訳で初めて進行形が使われる。(1)に26:26の例を挙げる。Tyndale訳とGeneva訳の dyd/did eate のように単音節の動詞の過去形の前にdidが用いられているのは、過去時制を明確にするためと言われている(寺澤 1969:124)。

(1) Matt. 26:26

Tyndale (1534) As they dyd eate Iesus toke breed ….

Coverdale (1535) And as they ate, Iesus toke the bred, ….

Geneva (1560) And as they did eate, Iesus tooke the bread, ….

Bishop's (1568) When they were eatyng, Iesus toke bread, ….

KJB (1611) And as they were eating, Iesus took bread, ….<sup>1</sup>

新約聖書においては英訳聖書で選ばれた動詞の形式は、訳者たちが旧約と同様に16世紀の訳文を参考にし、ギリシア語の訳でありながら英語としてふさわしい形式が何か考え抜いた結果といえるだろう。

### 2.1.2 パターンB

NRSVで初めて進行形が使われたケースは12例(9:2 were carrying, 11:2 was doing, 11:28 are carrying, 12:25 were thinking, 16:11 was not speaking, 19:13 were being brought, 21:9 were shouting, 21:11 were saying, 24:3 was sitting, 26:58 was following, 26:70 are talking, 28:2 was dawning) あった。この中には、(2)の11:2や12:25のように、NRSV以外の版では名詞というケースもあった。

(2) Matt. 11:2

NRSV (1989) When John heard in prison what the Messiah was doing,

RSV (1952) Now when John heard in prison about the deeds of the Christ,

WNT (1903) Now John had heard in prison about the Christ's doings,  
RV (1885) Now when John heard in the prison the works of the Christ,  
Sawyer (1861) AND John hearing in the prison of the works of Christ,  
Webster (1833) Now when John had heard in the prison the works of  
Christ,  
Wesley (1755) Now when John had heard in the prison the works of  
Christ,  
Mace (1729) in the mean time John having heard in his confinement of  
the actions of Christ,  
KJB (1611) Now when John had heard in the prison the works of Christ,

(2) では、“the deeds of the Christ” や “the works of the Christ” が決して難解ということはないのだが、“what the Messiah was doing” のように名詞ではなく節にすることで抽象度が下がりさらにわかりやすい訳になっている。

### 2.1.3 パターンC

次に、NRSVだけで進行形が使われているパターンAと、もともと欽定訳聖書でも進行形が使われているパターンBを除いた残りのケース、すなわちNRSVでは進行形が、欽定訳聖書では単純形が使われており、その中間の訳では様々に進行形が用いられているパターンCについて検討する。このパターンに属する例は全部で58例あった。表2は、どの聖書で進行形が用いられているかがわかるように一覧にしたものである。NRSVや欽定訳聖書の動詞形と直接対応が比較できない表現で翻訳されている場合は、「該当せず」という意味で「-」の記号を入れてある。

表2を概観すると、58例のうち56例において19世紀末以降のRSV、WNT、RVのいずれかですでに進行形が使われており、13例において3種類全てで使われていることがわかる。このことから、英訳聖書においては、19世紀末より従来単純形で表していた動詞が急速に進行形に取って変わられるようになったことがわかる。(3)、(4) にその例を示す。

表 2 NRSVの進行形と他の聖書の対応箇所 (パターンC)

箇所	NRSV	RSV	WNT	RV	Sawyer	Web	Wes	Mace	合計	箇所	NRSV	RSV	WNT	RV	Sawyer	Web	Wes	Mace	合計
2:20	1		1						2	20:17	1	1	1	1					4
2:22	1			1					2	20:18	1	1	1					1	4
3:10	1		1						2	20:22	1	1	1						3
3:11	1	1	1						3	20:29	1		1				1	-	3
5:23	1	1	1	1					4	20:30	1	1	1	1	1		1	1	7
5:47	1	1	-					-	2	21:05	1	1	1						3
6:03	1	1	1						3	21:12	1		1						2
6:16	1	-	1	-	-	-	-	-	2	21:13	1		1						2
8:06	1	1	1						3	21:23	1	1	1						3
8:24	1	1	-						2	21:31	1		1						2
8:25	1	1	1					1	4	21:45	1	1	1						3
9:03	1	1	-		-				2	22:11	1		1					-	2
9:09	1		-			1			2	22:18	1		1						2
9:10	1		1			1			3	24:01	1	1	1	1				1	5
9:18	1	1	1			1	1		5	24:42	1	1	1						3
9:24	1	1						-	2	24:43	1	1	1	1					4
10:16	1		1						2	25:08	1	1	1	1				1	5
10:20	1	1	1						3	26:02	1	1							2
11:10	1		1						2	26:21	1	1	1	1	1	1		1	7
12:02	1	1	1					1	4	26:45	1	1							2
12:46	1		1						2	26:46	1	1	1	1		1	1		6
12:46	1	1	1	1	1	1		1	7	26:47	1				1	1	1		4
12:47	1	1	1						3	26:59	1		1						2
16:08	1		1						2	26:69	1	1	1	1				1	5
17:05	1	1	1	1	1	1		1	7	27:19	1	1	1	1		1		1	6
17:09	1	1	1	1		1			5	27:24	1	1		1					3
17:13	1	1							2	27:47	1	1	1						3
20:06	1		1						2	28:05	1		1					1	3
20:13	1	1	1						3	28:07	1	1	1						3
合計	58	38	47	15	7	9	4	12	190										

(3) Matt. 20:13

NRSV (1989) Friend, I am doing you no wrong;

RSV (1952) Friend, I am doing you no wrong;

WNT (1903) I am doing you no injustice.

RV (1885) Friend, I do thee no wrong:

Sawyer (1861) Neighbor, I do you no wrong.

Webster (1833) Friend, I do thee no wrong:

Wesley (1755) Friend, I do thee no wrong.

Mace (1729) friend, I do thee no wrong:

KJB (1611) Friend, I do thee no wrong:

(4) Matt. 5:23

NRSV (1989) So when you are offering your gift at the altar, if you remember that your brother or sister has something against you, …

RSV (1952) So if you are offering your gift at the altar, and there remember that your brother has something against you, …

WNT (1903) If therefore when you are offering your gift upon the altar, you remember that your brother has a grievance against you, …

RV (1885) If therefore thou art offering thy gift at the altar, and there rememberest that thy brother hath aught against thee, …

Sawyer (1861) If, therefore, you offer your gift on the altar, and there remember that your brother has any thing against you, …

Webster (1833) Therefore if thou shalt bring thy gift to the altar, and there remember that thy brother hath aught against thee;

Wesley (1755) Therefore if thou bring thy gift to the altar, and there remember, that thy brother hath ought against thee, …

Mace (1729) When therefore you bring your gift to the altar, and there remember that your brother has reason to be displeas'd with you:

KJB (1611) Therefore if thou bring thy gift to the altar, and there rememberest that thy brother hath ought against thee;

(3) では、動詞は全てdoであるが、20世紀初頭のWNT以降進行形になっている。また、(4) では動詞が欽定訳聖書のbringから19世紀半ばのSawyer訳以降offerに変わって、単純形から進行形に変化するという経緯を辿っている。

NRSVから欽定訳までの各聖書における進行形の頻度を見ると、必ずしも年代順に増加しているわけではない。進行形の頻度はWNTが最も多く、次にRSV、RVと続き、それとほぼ同じ頻度で18世紀初頭のMaceが続いている。150年以上の間隔が空いているにも関わらず、RVとMaceが同じくらいの頻度というのは意外な気がするが、WNTとMaceは特に出版当時の口語的な英語に翻訳することを目指していたため、その翻訳方針が見事に反映されているといえ

よう。(5)からは、初期の訳ではMaceのみが進行形を取っていることがわかる。

(5) Matt. 20:18

NRSV (1989) See, we are going up to Jerusalem,  
RSV (1952) Behold, we are going up to Jerusalem;  
WNT (1903) We are going up to Jerusalem,  
RV (1885) Behold, we go up to Jerusalem;  
Sawyer (1861) Behold we go up to Jerusalem  
Webster (1833) Behold, we go up to Jerusalem  
Wesley (1755) Behold we go up to Jerusalem,  
Mace (1729) we are now going to Jerusalem,  
KJB (1611) Behold, we go up to Jerusalem;

(6)の例は、マグダラのマリアたちがイエスの墓を訪れたところ、イエスの遺体がなくなっていたのに気づいたところである。ここでは、NRSV、WNT、Maceの3聖書のみで進行形が使われている。進行形だけでなく、否定の命令文がfear notではなくdo not be afraid (NRSV, WNT) やdon't be frightened (Mace) のようにdoの否定形が共通して使われている点もこれらの訳文が口語的であることを表している。

(6) Matt. 28: 5

NRSV (1989) “Do not be afraid; I know that you are looking for Jesus who was crucified.  
RSV (1952) “Do not be afraid; for I know that you seek Jesus who was crucified.  
WNT (1903) As for you, dismiss your fears. I know that it is Jesus that you are looking for—the crucified One.  
RV (1885) Fear not ye: for I know that ye seek Jesus, which hath been crucified.  
Sawyer (1861) Fear not, for I know that you seek Jesus the crucified.  
Webster (1833) Fear ye not: for I know that ye seek Jesus, who was cru-

cified.

Wesley (1755) Fear not ye; for I know ye seek Jesus who was crucified

Mace (1729) don't be frightened, I know you are seeking Jesus, who was crucified.

KJB (1611) Fear not ye: for I know that ye seek Jesus, which was crucified.

17世紀から20世紀までの進行形に関しては、韻文よりは散文において、格式ばった英語が求められるジャンルよりは、会話などを含む小説のような口語において高い頻度が観察されている。慣用的な英語での翻訳であるWNTやMace訳において、明らかに進行形の頻度が高いことから、進行形の出現はより口語的な英語に多く見られると言える。また、WNTとMaceを除いた欽定訳からNRSVまでの伝統的な訳を順に見ていくと、それぞれの例文は同じ内容の翻訳をするという環境で、年代が進むにつれて進行形の使用頻度が高くなっていることがわかる。このことは、英訳聖書のマタイ伝という一つの書のみという限られた範囲であっても、初期近代英語期から後期近代英語期にかけて徐々に進行形の頻度が増加したことを確実に示している。

## 2.2 従属節内の進行形

次に、18、19世紀に単純形が進行形に置き換えられる場合、どのような統語的な環境で起きるのか、本研究で収集した例文から考察する。58例の中から、18、19世紀の聖書で進行形の使用が多い例を見てみると、時を表す副詞節の中に出現する動詞に進行形が早くから見られることがわかる。9種類の内、5種類以上の聖書で進行形が使われている箇所は9例あり、そのうち6例においてNRSVなどではwhileが導く副詞節のなかで単純形が進行形へと書き換えられている。(7)はその例である。

(7) Matt. 17: 5

NRSV (1989) While he was still speaking, suddenly a bright cloud overshadowed them

RSV (1952) He was still speaking, when lo, a bright cloud overshadowed them,

WNT (1903) He was still speaking when a luminous cloud spread over them;

RV (1885) While he was yet speaking, behold, a bright cloud overshadowed them:

Sawyer (1861) While he was yet speaking, behold a bright cloud overshadowed them;

Webster (1833) While he was yet speaking, behold, a bright cloud overshadowed them:

Wesley (1755) While he yet spake, behold a bright cloud overshadowed them,

Mace (1729) while he was speaking, a bright cloud surrounded them

KJB (1611) While he yet spake, behold, a bright cloud overshadowed them:

上記の例では、RSVとWNTを除き、全てwhileで始まる時を表す副詞節のなかで、欽定訳聖書の伝統的な単純過去形がWesleyを除くすべての版で進行形に変化している。Speakの動作の継続中に、‘a bright cloud overshadowed them’ という動作が起きたという時間的な関係性が進行形によって示され、単純形で表されたovershadowという動作はspeakingという動作の起点として機能している。その一方で、RSVとWNTではその関係性を表すのに、He was still speakingを主文とし、その動作の起点をwhenで始まる時の副詞節で表している。このように時の副詞節内における進行形は、18世紀前半のMace以降早い段階から認められる。時の副詞節は進行形が表す継続の幅を示すtemporal frame (またはtime-frame) (Los 2015:79; Huddleston 2002:165-166) の役割を果たしている。このように、継続を表す従属節をtime-frameとする例は、15世紀のMaloryにも見られる (Los 2015:79)。英訳聖書では他にもNRSVでasに導かれる副詞節でも同様のケースが見られた。

(8) Matt. 20:29

NRSV (1989) As they were leaving Jericho, a large crowd followed him.

RSV (1952) And as they went out of Jericho, a great crowd followed him.

- WNT (1903) As they were leaving Jericho, an immense crowd following Him,
- RV (1885) And as they went out from Jericho, a great multitude followed him.
- Sawyer (1861) AND as they proceeded from Jericho a great multitude followed him.
- Webster (1833) And as they departed from Jericho, a great multitude followed him.
- Wesley (1755) And as they were going from Jericho, a great multitude followed him.
- Mace (1729) At their departure from Jericho, a great multitude followed him.
- KJB (1611) And as they departed from Jericho, a great multitude followed him.

(8) を見ると、接続詞asはここでは「～した時に」という時の従属節を導く接続詞である。動詞は聖書によりdepart, go, proceed, leaveと異なっているが、初期の訳では単純形であったものが伝統的な訳を好むWesley、慣用的な翻訳のWNTで進行形へ置き換えられている。Maceは自由な訳で、前置詞に名詞departureを伴う副詞句で翻訳している。接続詞asが導く節内で、単純形が進行形に入れ替わった例は他に2例ある(17:9, 24:1)。進行形の出現する節は、中英語時代は主節よりも従属節の方が多かったが、近代英語から現代英語期にかけて主節に現れる進行形の頻度は高くなっていく。Strang (1982: 441) によれば、18世紀初期のnarrativeにおいては進行形は副詞的な従属節、特に時や場所の従属節、関係詞節に現れるのが常であった。Kranich (2010: 129) のARCHER-2の調査によれば、17世紀前半では主節に現れる進行形は45%であったが、20世紀後半には61%まで増加した。このように、従属節内に現れる進行形は、後期近代英語期において従属節から主節へと拡張した。英訳聖書においては基本的に翻訳であるにもかかわらず、時の副詞節内では早い段階から進行形への移行は抵抗が少なかったようだ。

## 2.3 継続を表わず進行形

欽定訳や18世紀の英訳聖書で、なぜ単純形から進行形へ移行したのか。統語的な理由だけではなく、文脈から動作の起きている状況を論理的に考慮し、明らかにある動作が起きている最中である場合進行形が適切だと考えられるようになったことも理由の一つであろう。初期近代英語期においては、単純形が未完了であることを表わずゲルマン語の伝統ののっとり、単純形の表す動作の時の幅が現代英語よりも広く、時を超えた普遍的な事実、少し前から起きていること、未だ完了せず継続して起きていること、これから起きることが含まれた。後期近代英語期になると、単純形で継続を表すのではなく、単純形の担う機能が多く曖昧性が生じるために進行形という別の形式が求められるようになったと考えられる。次の例 (9) を考察してみよう。イエスと弟子たちが湖で船に乗っていた時に大嵐に見舞われ、船が沈み始めたがイエスは何事もなかったかのように寝ている場面では、命の危険を感じた弟子たちが悲痛な訴えをする。現代英語では、今まさに船が沈み自分たちが死にそうになっているという臨場感は進行形でないと伝わらないが、(9) に見られるように、Mace訳を除いて19世紀末まで他の訳は欽定訳の“we perish”を繰り返している。このようなシーンでは、話者の関与や感情が進行形によってより明確に示されていると感じるだろう。口語訳と銘打っているMace訳からは、すでに18世紀の前半には進行形がかなり普通になっていることが示唆されるが、その一方で19世紀末まで単純形でも許容されるとも言えるのである。

(9) Matt. 8 :25

NRSV (1989) “Lord, save us! We are perishing!”

RSV (1952) “Save, Lord; we are perishing.”

WNT (1903) “Master, save us, we are drowning!”

RV (1885) Save, Lord; we perish.

Sawyer (1861) 8 :25 Lord, save us; we perish.

Webster (1833) Lord, save us: we perish.

Wesley (1755) Lord, save us; we perish.

Mace (1729) Lord, save us: we are sinking.

KJB (1611) Lord, save us: we perish.

## 2.4 未来を表す進行形

現代英語では、近未来の予定は「BE動詞＋現在分詞」の構造で表すことができる。このような進行形の用法は15世紀に始まり、18世紀初めに確立した(荒木・宇賀治 1984:438-441)。この用法では、使用される動詞が限られており、「遂行を予定することができる運動の動詞であることが多い」が、現代英語になってから運動の動詞以外にも拡張された(荒木・宇賀治 1984:440; Visser 1973: III, 1947)。NRSVのマタイ伝に見られる進行形の中にも、未来を表す例が5例ある(17:11, 17:22, 20:22, 24:42, 28:7)。この5例において、対応する欽定訳では、現在単純形1例、shall＋動詞原形が2例という内訳になる。マタイ伝の3例では、運動の動詞comeとgoである。(10)、(11)に示すのは、その例である。

(10)のシーンは、マグダラのマリアたちに墓守の男が、イエスは蘇ってガリラヤに向かうと告げるシーンである。動詞は全ての聖書でgoが使われているが、RV, Webster, Wesley, Mace, KJBでは単純形が、Sawyerではwill goが使われている。現代英語では、単純形goでは、イエスがガリラヤにすでに発ったのかこれから出かけるのかどうかははっきり語られていないと感じるだろう。NRSV, RSV, WNTでは、そこをはっきりさせるために進行形が使われており、単純形による訳と興味深いコントラストを見せている。

(10) Matt. 28: 7

NRSV (1989) "He has been raised from the dead, and indeed he is going ahead of you to Galilee;

RSV (1952) he has risen from the dead, and behold, he is going before you to Galilee;

WNT (1903) He has risen from the dead and is going before you into Galilee

RV (1885) He is risen from the dead; and lo, he goeth before you into Galilee;

Sawyer (1861) that he is raised from the dead; and behold, he will go before you into Galilee;

Webster (1833) that he is risen from the dead, and behold, he goeth before you into Galilee;

- Wesley (1755) that he is risen from the dead. And behold, he goeth before you into Galilee;
- Mace (1729) that he is risen from the dead; and that, he goes before you into Galilee,
- KJB (1611) tell his disciples that he is risen from the dead; and, behold, he goeth before you into Galilee;

(11) では、「主がいつ来るのかわからない」という内容なので、comeは明らかに未来に起きる動作である。しかし、欽定訳をはじめとし、shall comeとしたMace以外の18、19世紀の訳は全て現在単純形である。単純形が遅くまで選ばれた理由としては、従属節の中に起きている動詞だからということも言えるかもしれない。

- (11) Matt. 24:42
- NRSV (1989) Keep awake therefore, for you do not know on what day your Lord is coming.
- RSV (1952) Watch therefore, for you do not know on what day your Lord is coming.
- WNT (1903) Be on the alert therefore, for you do not know the day on which your Lord is coming.
- RV (1885) Watch therefore: for ye know not on what day your Lord cometh.
- Sawyer (1861) Watch, therefore, for you know not on what day your Lord comes,
- Webster (1833) for ye know not what hour your Lord cometh.
- Wesley (1755) for ye know not what hour your Lord cometh.
- Mace (1729) watch therefore, for ye know not at what hour your Lord shall come.
- KJB (1611) Watch therefore: for ye know not what hour your Lord doth come.

欽定訳聖書における明示的な未来表現は、ほとんどの場合shallである。(12)

の例では、NRSVのみで進行形が使われ、欽定訳ではshall comeである。その他の訳は、RSV, RV, Sawyer, Wesleyは現在単純形、WNTとMaceでbe to come、Websterでwill comeと様々な方法で未来を表している。

(12) Matt. 17:11

NRSV (1989) Elijah is indeed coming and will restore all things;

RSV (1952) Eli'jah does come, and he is to restore all things;

WNT (1903) Elijah was indeed to come," He replied, "and would reform everything.

RV (1885) Elijah indeed cometh, and shall restore all things:

Sawyer (1861) Elijah indeed comes, and shall restore all things.

Webster (1833) Elijah truly will first come, and restore all things:

Wesley (1755) Elijah truly doth come first, and regulate all things.

Mace (1729) 'tis true, Elias was to come first and set all things right.

KJB (1611) Elias truly shall first come, and restore all things.

20:22のNRSV “You do not know what you are asking. Are you able to drink the cup that I am about to drink?” では、これからまさに行おうとしている行為を表すのに、be about toが使われている。これに対応する他の聖書の訳はbe about to (WNT, RV, Sawyer, Wesley)、be to (RSV) とshall (Webster, Mace, KJB) に分かれる。Shallを避ける場合、近未来をどのように表すかは多様な方法があり、翻訳者は自由に選んでいるが、RV以前の訳には進行形もshallも見られない。後期近代英語期には他にもbe upon doing, be at the point to do, be upon the point to doなどが未来形の代替表現として使われた(荒木・宇賀治 1984:441)。

未来を表す進行形5例の中に、be going toが1例含まれている。「Be going + to 不定詞」の構造も進行形と同じようにすでに決まっている予定や計画について述べる時に使われるが、現代英語においても口語的な表現である。早い使用例は、15世紀後半から見られるが (Visser 1973: III, 1953)、やっと20世紀になってその使用は拡大してきた。(13) の例では、イエスは弟子の中から裏切り者が出る自分の運命の定めを知っているので、be going to be betrayed は的確な表現と言える。しかし、be going to を使っているのはNRSVのみであ

り、他の訳では、be to、be about to、willなど他の未来表現が選ばれている。

(13) Matt. 17:22

NRSV (1989) As they were gathering in Galilee, Jesus said to them,  
“The Son of Man is going to be betrayed into human hands, …”

RSV (1952) As they were gathering in Galilee, The Son of man is to be delivered into the hands of men,

WNT (1903) As they were travelling about in Galilee, Jesus said to them, “The Son of Man is about to be betrayed into the hands of men;”

RV (1885) And while they abode in Galilee, Jesus said unto them, The Son of man shall be delivered up into the hands of men;

Sawyer (1861) And as they were returning in Galilee, Jesus said to them, The Son of man is about to be delivered into the hands of men,

Webster (1833) And while they abode in Galilee, Jesus said to them, The Son of man will be betrayed into the hands of men:

Wesley (1755) And while they abode in Galilee, Jesus said to them, The Son of man is about to be betrayed into the hands of men;

Mace (1729) while they were in Galilee, Jesus said to them, the son of man will be betrayed into the hands of men:

KJB (1611) And while they abode in Galilee, Jesus said unto them, The Son of man shall be betrayed into the hands of men:

### 3 まとめ

欽定訳聖書以降18世紀から20世紀の英訳聖書9冊を選び、NRSVに見られる進行形とそれ以外の聖書の対応を調査した。英訳聖書を英語の史的变化の研究に活用する場合、近年の大規模コーパスで可能となる精密な統計的調査にはなじまないことや翻訳であることから原典の影響があること、聖書というジャンルからくる保守性など様々な問題がある。しかしながら、その一方で英訳聖書は同じ内容を極めて正確に翻訳しているため、工夫しながら使う

ことで新たな発見の可能性がある。

進行形は、近代英語期に大いに発達し、その頻度や使われる動詞の拡張、形式の完成、従属節から主節への進展など大きな変化を遂げた。特に19世紀から20世紀になると、その成長には目覚ましいものがある。本論文では、マタイ伝に見られる進行形という小さな範囲の研究であるが、従来近代英語期は欽定訳聖書の強い影響下にあり、当時の英語の発達がどの程度反映されているのか疑問視する向きがあるにもかかわらず、調査の結果興味深い事実が明らかになった。まず、19世紀末、特にWNTより進行形は顕著な増加が見られた。NRSVの進行形の頻度の高さは、大規模コーパスで得られた結果とも呼応する。Mace訳やWNTのように伝統にとらわれない慣用的な英訳では、同時代の伝統的な訳よりも進行形への改訂が多く行われたことで、進行形と口語性との関係を確認することができた。また、進行形への改訂は時の副詞節内で早くから見られることや、従来単純形で訳されていた箇所でも継続の意味が重要である場合、19世紀末より進行形へと移行しやすいこともわかった。一般的には18世紀の初めには成立していたと思われる未来表現としての進行形の出現は、聖書では遅く20世紀の訳からであった。

本論文では触れることができなかったが、このような英訳聖書の比較をすることにより、完了相、始動相などのアスペクトをどのように表現するかという問題についても有益な示唆を得ることができるだろう。

## 注

\* 本稿は、英語コーパス学会SIG「コーパスと言語変異研究会」の2021年度研究会における研究発表（2022年2月26日、オンライン）に基づいている。

<sup>1</sup> 本論文では、引用は参考文献にあげてあるBibleGateway、Bible Hub、Study Bible Tools、StudyLight.orgの本文から行った。綴り字が16世紀の初版のものから現代英語に変えてある場合もそのままの引用となっている。以下の引用についても同様である。

参考文献

- 荒木一雄、宇賀治正朋(1984)『英語学大系 第10巻 英語史III』大修館書店、東京
- Arnaud, René (1998) "The Development of the Progressive in 19th Century English: A Quantitative Survey," *Language Variation and Change* 10, 123-152.
- Berg, Alexander, and Laurel J. Brinton eds. (2017) *The History of English Vol. 4 : Early Modern English*, De Gruyter Mouton
- BibleGateway, <https://www.biblegateway.com>
- Bible Hub, <https://biblehub.com/erv/matthew/2.htm>
- Dennis, L. (1940) "The Progressive Tense: Frequency of Its Use in English," *Publications of the Modern Language Association of America* 55, 855-865.
- 船戸英夫 (1969)「英語聖書の歴史」寺沢芳雄他『英語の聖書』所収、富山房、東京、1-79.
- Gordon, Alexander (2004) "Mace, Daniel" in *Dictionary of National Biography*, revised by M. J. Mercer, <https://doi-org.seikei.idm.oclc.org/10.1093/ref:odnb/17477>
- 橋本功 (1995)『聖書の英語 一旧約原典から見た一』英潮社、東京
- 橋本功 (2005)『英語史入門』慶應義塾大学出版局、東京
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Jespersen, Otto (1931; 1986) *A Modern English Grammar on Historical Principles Part IV*, Meicho Fukyu Kyokai, Tokyo.
- Kranich, Svenja (2010) *The Progressive in Modern English: A Corpus-Based Study of Grammaticalization and Related Changes*, Rodopi, Amsterdam, New York.
- Los, Bettelou (2015) *A Historical Syntax of English*, Edinburgh University Press, Edinburgh.
- Marlowe, Michael D. "Mace's New Testament, 1729"

<http://www.bible-researcher.com/mace.html>

- Nurmi, A. (1996) "Periphrastic Do and BE+ ING: Interconnected Developments?" in T. Nevalainen and H. Raumolin-Brumberg (eds.) *Sociolinguistics and Language History: Studies Based on the Corpus of Early English Correspondence*. Rodopi, Amsterdam, 151-165.
- Seoane, Elena (2017) "Chapter 5 Syntax" in Berg and Brinton, 68-88.
- Smitherberg, E. (2005) *The Progressive in 19th Century English: A Process of Integration*, Rodopi, Amsterdam.
- Strang, Barbara M. H. (1982) "Some Aspects of the History of the Be + Ing Construction," *Language Form and Linguistic Variation: Papers Dedicated to Angus McIntosh* (Current Issues in Linguistic Theory 15), ed. by John Anderson, 427-474, John Benjamins, Amsterdam.
- Study Bible Tools, <https://www.biblestudytools.com>
- StudyLight.org, <https://www.studylight.org/bible/eng.html>
- 寺澤盾 (2013) 『聖書でたどる英語の歴史』大修館書店、東京
- 寺澤芳雄 (2016) 『聖書の英語の研究』研究社、東京
- 寺澤芳雄、川崎潔編 (1993) 『英語史総合年表—英語史・英語学史・英米文学史・外面史—』研究社、東京
- Visser, Fredericus, Th. (1973) *An Historical Syntax of the English Language Part III, 2nd Half: Syntactical Units with Two and with More Verbs*, E. J. Brill, Leiden.